

動的な認識状態モデルベースのなぜ-疑問モデルを用いた 語用論的説明理論

小川文紀(Fuminori OGAWA)

大阪大学大学院人間科学研究科

科学哲学において説明理論とは、(科学的) 説明とは何かに答えることを目的として、説明の主要な構成要素である被説明項と説明項に着目し、これらを用いて説明の必要十分条件を与えるような理論を指す。そしてそうした説明理論の中でも、説明の構成要素として被説明項や説明項に加えて文脈や信念などの語用論的要素を含んだ説明理論は、語用論的説明理論と呼ばれる。

語用論的説明理論の提唱者の一人であるバス・ファン・フラッセンは、文脈的要素を取り入れたなぜ-疑問の理論と呼ばれる語用論的説明理論を構築した (van Fraassen 1980)。彼の説明理論の特徴は、なぜ-疑問に着目している点にある。彼は、文脈に応じて説明の要求が変化するなぜ-疑問 Q を、トピック P 、対照クラス X 、関連性関係 R から成る三つ組 $\langle P, X, R \rangle$ としてモデル化し、そうしたなぜ-疑問 Q が生じるか否かを背景情報 K によって評価した上で、なぜ-疑問 Q に対して与えられた答えを K の部分 $K(Q)$ によって評価する語用論的説明理論を構築した。

一方で、認知科学者で信念改訂理論の専門家であるピーター・ゲルデンフォースは、説明が行われる際の信念の変化に着目して、動的な認識状態モデルを用いた語用論的説明理論を構築した (Gärdenfors 1988)。彼の説明理論の特徴は、洗練された認識状態モデルを用いている点にあり、説明の評価はコントラクションと呼ばれる信念変更によって得られた認識状態モデルと相対的に行われる。

本発表では、両者の理論を組み合わせた新たな語用論的説明理論を提案する。この語用論的説明理論は、両者の類似点を通じて、ファン・フラッセンのなぜ-疑問モデルの要素を、ゲルデンフォースの認識状態モデルに置き換えることで得られたなぜ-疑問の理論である。この洗練化によるメリットの一つは、「自明化性」(Kitcher 1989) と呼ばれる致命的問題を引き起こすとされる関連性関係 R が、なぜ-疑問モデルから取り除かれている点にある。本発表では、関連性関係 R の役割が対照クラス X によって代替されていることを確認したい。

Van Fraassen Bas, C. (1980). *The Scientific Image*. Oxford University Press.

Gärdenfors, P. (1988). *Knowledge in Flux. Modelling the Dynamics of Epistemic States*. MIT Press.

Kitcher, P. (1989). Explanatory unification and the causal structure of the world. In P. Kitcher & W. Salmon (eds.), *Scientific Explanation*. Minneapolis: University of Minnesota Press. pp. 410-505.